



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	パネルA「シベリア出兵：その内外への波及」
Author(s)	兔内, 勇津流
Citation	ロシア史研究, 110, 108-110
Issue Date	2023-06
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95212
Type	journal article
File Information	Tonai_2023_110_108-110.pdf



パネルA 「シベリア出兵——その内外への波及」

兎内 勇津流

本パネルは、二〇一八年から連続しているシベリア出兵をテーマとするパネルの四回目として、シベリア出兵の派遣軍が駐在した沿海州、およびその周辺地域である朝鮮とモンゴルを取り上げる、以下の三つの報告から構成された。

兎内勇津流「沿海州ゼムストヴォ参事会臨時政府（一九二〇年）

試論」

長田彰文「シベリア出兵と朝鮮独立運動——社会主義と民族主

義の相克・両立」

青木雅浩「ロシア反ボリシェヴィキ派とモンゴル」である。

兎内の報告が取り上げた沿海州ゼムストヴォ参事会臨時政府は、コルチャーク政権が崩壊した一九二〇年初めに極東各地に成立した地方政権のひとつで、一九二〇年一月から一年近く存続した。シベリア鉄道の終点であり、ウラジオ派遣軍のお膝元だったウラジオストクに成立したこの政権は、その後、四月の日本軍による「武装解除」事件、六月の国民議会の召集と通貨改革、その後の極東諸政権の統一問題への対応、十一月にはセミョーノフ政

権の崩壊による白軍の受け入れ問題などの紆余曲折の末、チタの極東共和国の主導による極東の統一を受け入れ、ヴァシーリー・アントーノフ（一八八二―一九六七）の率いる極東共和国沿海州政庁に改組されて消滅することになった。

これについては、報告をもとにした論文が本号に掲載予定のため、詳細については、そちらを参照いただきたい。

シベリア出兵を考える上で、朝鮮はもとより、それと国境を接する沿海州や中国の間島地方に住んでいた朝鮮人のことを視野に入れる必要がある。極東ロシアに住む朝鮮人の独立運動への参加については、一九七〇年代以降、原暉之、劉孝鐘などがいくつかの論文で取り上げてきたことであるが、ロシア語のハードルに加えて日韓の歴史問題も背景にあるのか、日本では最近あまり研究が出ていないように思われる（朝鮮独立運動そのものやコミンテルンに関係した朝鮮人については研究が出ている）^{①②}。

長田報告は、ロシア領極東に住んでいた朝鮮人の独立運動がロシア革命の勃発により活発化し、朝鮮総督府の統治下にあった本

国、上海やアメリカ等、その他の地域との連絡をとりつつ展開したことに、特に三・一運動の生じた一九一九年の状況を中心に国際的な視野からまとめた。

ロシア領極東における朝鮮人社会、およびその日本軍との関係については、近年のロシアにおける史料の刊行や研究の進展のほか、朝鮮総督府からウラジオ派遣軍に出向した篠田治策（一八七二～一九四六）の文書がアメリカのフーヴァー研究所文書館で公開された。こうした新しい史料を検討して、沿海州の朝鮮人のあり方を多角的に研究することが望まれる。

青木報告は、一九二一年夏にロマン・ウンゲルンらが外モンゴルから放逐されて人民政府が成立して以後、ロシアの反ボリシェヴィキ派、具体的にはグリゴリー・セミョーノフ（一八九〇～一九四六）とモンゴルとの関係について、黒木親慶文書などから新たな史料を発掘し検討しようとしたものである。

セミョーノフは、シベリア出兵に関わった重要人物として認識されている一方、その活動には十分にわかっていないことが多くある。特に、一九二〇年秋一〇月にザバイカルを逐われて以後については、断片的にしか知られていないように思われる。³⁾

外モンゴルの人民政府には、人民党だけでなく、エルベクドルジ・リンチノ（一八八八～一九三八）をはじめとするブリヤート・モンゴル人知識人、王公、高位僧らが参加しており、彼等は必ずしもソヴィエト・ロシアの関与を望まなかった。

セミョーノフは、外モンゴルの王公たちと連絡をつけ、「モン

ゴル民族代表会議」を組織してその涉外代表に就くなど活動し、外モンゴルからソ連勢力を排除することを望むモンゴル人との間に、互いを利用し合う共存関係を築いたと見られる。一九二四年にセミョーノフはフルンボイルの森林伐採権の取引を試み、さらにモンゴル貿易商社を設立するなど、モンゴルを材料に政治的再起を試みた。また、張作霖との連絡も見られた。

こうした動きに対して、ソ連側はセミョーノフらを強く警戒し、そのことが対モンゴル政策に影響し、外モンゴルから王公や高位僧たちを排除することにつながったと考えられる。

コメンテータの横手慎二からは、コルチャーク政府崩壊後の極東の動向を、ロシア革命史のなかでどう位置づけるかという問いが投げかけられた。当日はあまりうまく答えられなかったように思うが、ロシア極東での事態の展開も、革命・内戦のプロセスのひとつコマであったことには違いない。ロシア全体から見ると、辺境地での些細な出来事のようにありながら、ロシアを東アジア・太平洋地域と結びつける地政学的意味も無視できない。そういう、極東のいくつかの特殊事情を考える必要があるだろう。たとえば、一九一八年夏にボリシェヴィキ政権が倒された極東では戦時共産主義を経験せずにネップが訪れた。ソヴィエト政権としては、国家の分裂を解消し国民の団結をはかる意味からも、シベリア出兵中は農村を厳しく収奪することを避けたと見られる。

その一方で、極東共和国は、ソヴィエト・ロシアの対外経済関係を補完した面があり、革命政権の国際的地位が安定しない中で、

貿易ルートのひとつとして機能したと指摘されている。

また、ロシア革命を担った人々との人的関係も重要である。たとえば、臨時政府で一時内相を務めたエスエルのニコライ・アフクセンチェフ（二八七八―一九四三）とともに「ロシア再生同盟」で活動し、一九一八年にはともに執政政府を担ったヴァシーリー・ボルディレフに注目することができる。一九一八年一月の政変によってコルチャーク政府が成立すると、ボルディレフはヨーロッパに亡命したアフクセンチェフらと連絡しつつ活動した。一九一九年は日本に滞在し、一九二〇年初めにコルチャーク政府が崩壊するとすぐにウラジオストクに入り、現地の地方政権で活動することを試み、しばしばキーパーソンとなった。⁽⁴⁾この他にも、ミハイル・デイーチェリフスのような、ロマノフ朝の復興を目指す君主主義者などさまざまな政治的立場の人々が、ロシア極東に入りその政治に関与した。そうしたつながりをひとつずつ解いていくこともまた、今後のシベリア出兵史研究の重要な課題であろう。

こうして何とかパネルを充実させることができたのは、報告者各位はもちろんとして、コメンテータ、および参加して議論を盛り上げてくださったみなさまのおかげであり、改めて厚く御礼申し上げます。

註

(1) Teruyuki Hara, "The Korean Movement in the Russian Maritime Province, 1905-1922," in Dae-Sook Suh (ed.), *Koreans in the Soviet Union* (Papers for the Center of Korean Studies, no. 12) (Honolulu: University of Hawaii, 1987); 劉孝鐘「極東ロシアにおける一〇月革命と朝鮮人社会」『ロシア史研究』四五号、一九八七年など。

(2) 水野直樹「初期コミンテルン大会における朝鮮代表の再検討」『初期コミンテルンと東アジア』研究会編著『初期コミンテルンと東アジア』不二出版、二〇〇五年所収。小野容照「朝鮮独立運動と東アジア——1910-1925」思文閣出版、二〇一三年。小野「韓国「建国」の起源を探る——三・一独立運動とナショナリズムの変遷」慶応義塾大学出版会、二〇二一年など。

(3) 一例をあげると、セミョーノフと一九二二年五月にウラジオストクで生じたメルクーロフ政変、およびそれによって誕生した治アムール臨時政府との関係を扱った論文は、日本ではまだない。

(4) 革命・内戦期のボルディレフについては、以下のボルディレフの自著および関連論文を参照。Bordyrev B. I. Директория, Контрак, интервенты: воспоминания (из цикла "Шести лет" 1917-1922 гг.). Новониколаевск, 1925; Geoffrey Hosking, "A Democratic White General: V. G. Boldyrev," *Revolutionary Russia* 29: 2 (2016), pp. 169-191; Geoffrey Hosking, "Last Battles: Vladivostok and the Far Eastern Republic, 1920-22," in David R. Stone et al (eds.), *The Russian Civil War: Campaigns and Operation* (Russia's Great War and Revolution, v. 5, Military Affairs in Russia's Great War and Revolution, 1914-22, Book 2) (Bloomington: Slavica, 2021), pp. 185-215; 鬼内勇津流「ヴァシーリー・ボルディレフと日本——一九一九年滞日期を中心に」『ロシア史研究』一〇五号、二〇二〇年、三一―三二頁。および同著者の本誌掲載論文。